復興への思い・感謝 右腕に

石巻から社会人入り 高橋 祐太投手

紀の国スポーツ

東日本大震災で被災し、今春石巻専修大を卒業した宮城県石巻市出身の高橋祐太投手(22)が、有田市の社会人野球チーム「和歌山箕島球友会」でプロを目指して練習に励んでいる。「野球ができる感謝の心を忘れることなく頑張りたい」と意気込んでいる。(白石玄明)

「感謝の心を忘れることなく頑張りたい」と意気込む高橋投手(有田市で)

昨年3月11日、高橋投手は、痛めていた足の治療を終えて帰宅中に震災に遭遇。両親と妹は無事だったが、石巻市南浜町の家は津波で流され、「食事や洗濯など、身の回りの世話をしてくれた。感謝の言葉しか出てこない」という祖母、そして叔父を亡くした。

被災後、大学野球部の室内練習場は全国から届けられた支援物資であふれ、約70人いた部員の大半が県外の実家などへ移るなど、野球どころではなかった。

高橋投手自身も、仙台市に住む妹の家に両親と身を寄せた。「食料やガソリンが手に入らない中、ひたすら生きることだけを毎日、必死に考えた」と振り返る。

1か月半近くたち、ようやく野球のことを考えられるようになり、ラグビー部の石巻商高のブルペンなどを借り、走り込みやキャッチボール、投球練習などを再開した。

ただ、不慣れな環境の中でなかなか思うように充実した練習ができない状態が続いた。そんな時、大学野球部の監督から、和歌山箕島球友会について知らされた。

「縁もゆかりもない和歌山だが、働きながら野球が続けられるのなら」と昨秋、入団テストに挑んだ。「力強い球を投げ込む姿が印象的だった」と西川忠宏監督(51)らを認めさせ合格した。両親から「プロに行けるよう、和歌山で頑張ってきなさい」と背中を押され、今年1月、復興がなかなか進まない故郷に後ろ髪を引かれつつ有田市に来た。

見知らぬ土地で、なじめるか不安だったが、監督やメンバーから温かく迎えられ、「野球ができる環境に感謝せねば」と、自分自身を奮い立たせるようになった。4月からは、和歌山市内の会社で正社員としても働き始める予定で、「仕事と野球のメリハリをつけながら、社会人として恥ずかしくない行動をしていきたい」と気を引き締める。

高橋投手は、「試合では、感謝の心と復興への思いを込めながら投げたい」と力強く語る。